



嚶鳴同窓会東京支部だより

～ 特別号 ～

第25号

2021年
4月

繋ぐ から エール へ

東日本大震災から今年で10年。あの年、笠井ひで子支部長(当時)は「あなたの笑顔に会いたい」と呼びかけ、支部の絆を深めました。そして今。新型コロナウイルス感染症が社会を覆い、首都圏では二度にわたり緊急事態宣言が発令されました。経験したことのない状況の中で、支部活動の意味が再び問われています。

役員メールで議論を重ね、出てきたキーワードは「繋ぐ」。会員を繋ぐ。世代を繋ぐ。母校や本部と繋ぐ。故郷へ繋ぐ。そして繋ぐために、心の距離を縮めるために、支部だよりを活用しようと考えました。もし手にした紙面から、共感や驚き、元気や楽しさ、郷愁や安らぎなど感じ取っていただけたならば、それはとても嬉しいことです。更に支部だよりの取材を進めるうちに、もう一つの「繋ぐ」が見えてきました。

話は少し飛びますが、皆さま方はやまがた育英会という名称を聞いたことがありますか。県出身者のための学生寮が、駒込や板橋にあることを知っていましたか。私は支部活動に携わるまで、どちらも知りませんでした。

現在、二つの寮には合わせて134名の大学生が入寮しています。内、西高の卒業生は15名弱。「新型コロナウイルス感染

症の影響を直に受ける大学生」という情報が日常的に報道されていますが、寮生たちも例外ではありません。

支部と寮は、これまでも多少の関わりはありました。例えば、寮生を含む新卒生を支部総会へ招待しています。また寮の会議室を借りて役員会を開催したこともありました。しかしこの状況になったことで、もう少し意識して繋がりを持つことも必要なのではないか、と感じるようになりました。会員に学生たちの情報を提供する、同窓生をはじめとする同郷の若者にエールを送る。それは故郷から離れ、首都圏で活動している支部だからこそできる役割ではないでしょうか。もちろん寮生に限ったことではありません。手始めとして、支部だよりの特集に「コロナ禍の学生寮」を取り上げてみました。皆さま方はどのようにお感じになったでしょうか。

最後になりましたが、お忙しい中御寄稿いただきました執筆者の皆さま方に心より御礼を申し上げます。いただいたお言葉は、私たちへのエールです。しっかりと受け止め次の世代へと繋いでまいります。ありがとうございました。

支部長 鹿野 由貴(昭和48年卒)

昨年の総会でお祝いが
出来なかった喜寿学年
からのお便りです

喜寿すぎて、コロナ時代に

新型コロナの状況下、支部総会開催に向けて支部長さんをはじめ幹事のみなさまは大変ご苦労なされたことでしょう。幸い私達はコロナ以前に山形で喜寿のお祝いに集うことができました。椿山荘での会も楽しみにしていましたが、昨年支部よりお心尽しの故郷の味と母校の思い出の品をお送りいただき心より感謝申し上げます。早く平和な日常が戻り、同窓の皆様と支部総会でお会いできる日が訪れること切に願っています。

私達は戦中生まれ、親が苦労して育ててくれた世代です。母(父は他界)は「炎天下、山形駅前から姉妹3人をリヤカーに乗せて疎開先の寒河江の親戚まで歩き続け、到着したら終戦だった」と書き残していました。

ちょうど西高を卒業した姉のお下がりの制服を着て入学。部活のテニスや担任の先生の熱心な授業など思いだします。生涯働けるようにと母の勧めで薬学に進み、男女格差が当然の時代に3人の子を育てながら企業で働き続けました。保育園や学童保育の増設、地域の子供会活動などにも係わり、大学での研究も並行し慌ただしく過ごしてきました。

長年製薬会社と大学で新しい薬の研究開発に携わってききましたが、薬が実際にどう使われているか学びたいと思い、

現在薬剤師の仕事もしています。抗がん剤や麻薬も日々進化し、学ぶことの多い日々です。できるだけ薬に頼らない健康な身体づくりも研究テーマです。

30年前からニューヨーク、東京など国内外のマラソンに参加し、槍ヶ岳縦走などもしてきましたが、70歳すぎからは脊柱管狭窄症と付き合いながら、毎朝駒沢公園で仲間と体幹トレーニング、テニスを月数回、時々低山歩きを実践しています。2年前に山形在住を含むクラスの有志11名で高尾山に登り、全員が山頂に到達でき感激しました。

戦中・戦後の不便な時代を生き抜いた義母105歳、母94歳と長寿でしたが、コロナ後の10・20年後の私達はどうか生きていますか。まだ78歳、次世代に負の遺産を残さぬよう模索しながら残りの人生を歩んでいきたいです。

(薬学博士、薬剤師)



36年卒の皆さま方から届いたお礼状 自作のイラスト、達筆、素晴らしい

永遠なる歴史を胸に秘め

大先輩のメッセージと
社会の第一線で働く現役会員の声
世代を超えて繋がり続ける支部は
会員一人一人がその歴史です

百歳をこえて生きる

元支部長 神尾 ひさ(昭和11年卒)



満百二歳になりました。コロナ禍の中ですから、外出は控えて静かに暮らしています。普段はリハビリを行い、デイサービスにも通っていますが、足腰は大分弱くなりました。すっかり娘に甘え、支えられています。

好きなスポーツ観戦はもっぱらテレビになりました。遠い思い出ですが、前回の東京オリンピックは競技場で観戦しましたし、機会があれば様々なスポーツ観戦に出かけました。八十八歳まで娘とプールにも通いました。

いつまで長生きしてよいものかと考えることもありましたが、主治医から「神尾さんはやるべきことがまだまだあるのでしょ。生かされているんですよ。」と言われ、それなら私にできることをやっていこうと奮起しました。生きている限りは生き抜く、そんな気持ちです。

娘はいつも「頑張って長生きした人には幸せなゴールが待っているはず。長生きして良かったと思えるように暮らそうね。」と言っています。

嚶鳴同窓会東京支部の活動は、次々に頼もしい方々に引き継がれ年々新しい風が吹いていることでしょう。これからも充実した活動を続けていくと期待しています。

私を思い出していただいてありがとうございました。



会員ご尊父作品

小倉さん(昭和26年卒)は西高山岳部を創られた方。早大高山岳部の女子部のリーダーとなる。1958年早大赤道アフリカ遠征隊参加。日本女性初のキリマンジャロ登頂。1975~92年朝日カルチャーセンター「女性のための登山教室」開講。ACCバックアップのもと75年女性だけの登山同好会「紫蘭会」発足。「ぶーちゃん」の愛称のもと会長を慕って入会した会員も多く、安全で楽しい登山、ユーモアを解し、自立した山行を目指すことをモットーに活動。

私は嚶鳴同窓会総会の折、会長の本を買い、勧誘されて平成7年入会。新人講習の実技は蔵王で行われたこともあり、山形ファンも多い。平成29年には、会員の希望で芋煮会を山形チームで企画、本場の雰囲気味わってもらおうと馬

充実した六年間

工藤 厚(昭和26年卒)

昭和20年4月、前年放火にて校舎全焼の山形第一高女に入学、女子師範の寄宿舎、畳の部屋が教室であった。同月の19日には学徒動員先の川崎が空爆を受け4年生5名と田中先生が爆死、遺骨を抱いて帰ってきた上級生を山形駅で出迎えた。終戦後は教科書の一部を墨で塗りつぶすことに始まったが、食糧難で授業を休んでの農業奉仕が続いた。

翌年に配られた教科書は藁半紙に印刷されているだけ、自分で切り揃え表紙を付けた粗末なものだった。学制改革により新制第四高校になり、六年の学校生活を送ることになったが、現在の地に移るまでの校舎復興運動は忘れがたい。特に21年11月の5時間に及び復興生徒大会は上級生を中心に熱気溢れ下級生も涙を流すほどだった。復興のための二度のバザーは大成功で委員の上級生・先生・父兄の各方面への陳情、復興費の負担等々、23年12月末ようやく完成した校舎へ雲の降る中、自分の机と椅子を背に歩いたあの日が、現在の立派な校舎の礎になったと感慨深い。

昭和25年第二高校と合併し南高となり初めて2年下になら男女の1年生が入学してきた。2年生3年生は共学にはならず、部活動のみ男女で活動、文芸部も合同で文集を数冊作り、夏休みに顧問の芳賀先生に引率されて、部員と共に石川啄木・宮沢賢治ゆかりの渋民村や花巻を訪ね紀行文集を作ったこと、6月には3年生の女生徒の関西旅行があり京都の金閣寺を拝観し翌7月放火によって消失したことも思い出深い。また、午後の授業を出席扱いで参加が許された山形詩人協会主催の講演会に、高村光太郎が「千鳥と遊ぶ智恵子」を涙を流しながら朗読した声は今も耳に残っている。

第一高女、併設中学、四高、南高と数回の校名変更に翻弄されたが明治36年以来変わらぬ「嚶鳴」という名のもとに学んだ六年間はたのしく充実した日々であった。

人と自然とちょっと冒険(小倉董子)

山田 栄子(昭和35年卒 紫蘭会会員)

見ヶ崎川の河原で行った。宿への途中、国史跡の彼岸花の美しい慈恩寺に寄り、志津温泉に一泊、翌日は月山、山寺と山形の旅を楽しんでもらい大変喜ばれた。

近年は、会員の高齢化でコーラス部が発足。山の歌など楽しんでいる。2015年、創立40周年には、会長作詞の「紫蘭会の歌」が誕生し歌いつがれている。昨年は45周年をむかえたが、コロナでイベント等は中止となり記念品と記念誌が発行された。小倉先輩に出会い良き仲間と沢山の山を楽しめたことに感謝している。



ぶーちゃんお気に入りの写真

病院でのコロナ対応

西崎 淳子（平成5年卒）

コロナ禍のなか、皆様も制限多い生活をなさって我慢されている事が多いかと思います。ダイヤモンド・プリンセス号が横浜港に2020年2月に寄港し、日本でも新型コロナウイルスが他人事ではなくなりましたが、今現在も闘い続けているとは思っていませんでしたよね。私は、乳腺外科医ですが、感染とは直接関係のない部署でもその影響は大きいものでした。

①病院での感染対策が日々強化

待合室の椅子や手すりなどのアルコール消毒をし、待合室でのソーシャルディスタンスを保つ為に、1席ずつ空けて座るように案内札が貼ってあります。また、透明のゴミ袋を切り開き、全ての受付カウンターに遮蔽シートとして利用しました。今は医療用品も揃い、必要なだけ使用できるようになりましたが、一時はマスクが不足し、家で洗って再利用したこともありました。

②診療の工夫：電話診療

感染拡大防止のため例外措置として、条件つきですが電話診療による処方箋発行ができるようになりました。電車を乗り継いで通院される患者さんにとっては朗報です。セカンドオピニオンもリモートで対応が始まりました。

③新型コロナウイルスが怖い→必要な医療機関の受診控え

私の患者さんにも、乳癌だろうと思っていたけどウィルスが怖くて、かなり大きくなるまで来院できなかった方がいました。マスクの着用や手洗いうがい、ソーシャルディスタンス、密を避けるといった基本的な対策がなされれば、やたらに感染するわけではありません。病気は受診時期も大事ですので、検診で要精査の場合や症状があれば、病院に相談していただきたいです。

人との絆やコミュニケーションは心の健康にとっても大切です。早くワクチンや治療薬が普及し、安心して暮らせるように祈っております。

（聖路加国際病院 乳腺外科 副医長）

小倉さんご子息から「母のアルバム整理中に、西高登山部スキー山行の写真が出てきました。蔵王 コーボルトヒュッテでの冬合宿の様です」とメールを頂き山田さんに文章をつけていただきました。小倉さんは入居先施設でご健在です



大学生のみなさんへ

齋藤 ひろみ（昭和55年卒）

「大学の経験と学びを、4月からもきっと生かします！」私の勤務校の卒業式後の学生の声です。教員になる学生が多数を占めますが、一般企業、公務員、大学院進学と進路は様々です。2020年度はコロナ禍で、オンラインの授業・卒業研究活動が続きました。中には1年ぶりに対面で会う学生もありました。かれらは、この一年を振り返って、仲間からの励ましのことが力になった、孤独を感じることもあったが最後まで論文を書きあげたことが自信になったと語っていました。自身と向き合いつつキャリアを切り拓いたという自負と清々しさが感じられました。教員として誇りに感じましたし、次の一步を逞しく踏み出して欲しいと願いつつ送り出しました。

グローバル化とネットワークのオンライン化により、社会はこれまで以上に多次元での多様性が求められるようになるでしょう。見方を変えれば、皆さんの前には無限に選択肢が広がっているということです。そして、自身の価値観に共鳴し、共に探究し、楽しみを分かち合う仲間との出会いがきっとあります。身構えずに心と体を開いて可能性を探り、チャレンジし続けてください。

（東京学芸大学 教職大学院 教授）

郷 愁

武田 祐子（平成元年卒）



生涯を山形で暮らすはずだった私にとって、フジテレビ入社は運命を大きく変えた。情報の最先端で刺激的な日々。「初めて」が常になり、疲弊度も大きいが満足感も大きい。テレビを通じて多くの人々が笑ったり感動したり世の中を知ったり。それが堪らなく嬉しかった。

四半世紀が過ぎて、いつのまにか「お茶の間」という言葉は影を潜め、多くの人はネットで情報を得るようになった。テレビを囲んだ家族での会話は少なくなっているという。そして人恋しいのか SNS で誰かと繋がる。「独り」は自由と寂しさが同居する。コロナ禍で家族と一緒にいる時間が増えた。喜ばしいはずだが、その分自由が無い。つくづく無い物ねだりと感じたりする。

「早くお風呂に入りなさい！」と息子に何度も言いながら、昔自分に言い続けた母の気持ちをやっと知る。

月日は流れ、住む場所が変わっても、母への普遍的な想いは生き続けるものだとして東京で芋煮を作りながら感じるのだった。

（アナウンサー）

アカシアの道に風薫り

会員からの便り
想いやコロナ禍で考えたこと
そして 近況報告など
西高卒業生らしい
彩り豊かなページになりました！

渡辺 えり（渡邊 えり子 昭和 48 年卒）

山 形 の 女

今山形でこの原稿を書いています。介護施設にいる両親とコロナ禍で会うことが叶わず、今年の元日にも母に誕生日のお祝いを言いたくて出かけましたが元日も会うことは出来ませんでした。ようやくガラス越しなら 10 分間だけ会えるということで帰郷しました。帰郷のもう一つの理由に大戦中シベリアに抑留された 50 万人の中に 600 人の女性がいて帰国できた女性の中の一人が高校時代の友人のお母さまだということが分かったのでその取材をさせていただいたのです。山形の七日町で元気にお暮しの 94 歳です。西高に通っていた時も全くそのことは知らず、四年前に NHK のドキュメンタリー番組で放映されて知ったのでした。看護師として菊水隊という軍隊を作られて満州からシベリアに送られたとのこと。極寒での石切り場での労働はどんなにか辛かったことでしょう。女性で苦労したのはやはり生理中の手当てだったと聞きます。シャツを切り裂いて手の凍る川で洗う。戦争中のあってはならないような体験を語り継ぎ次代に伝えていくのが私たちの役目だとつくづく感じました。

コロナ禍演劇の灯を消すまいとの思いで文化庁に申請に行きました。コロナ禍だからこそ人々の精神を支えるアート、娯楽が必要なことを訴えました。



【文化庁】

コロナ禍、演劇に対する支援を文化庁に要請

五十嵐 佳子（沼田 佳子 昭和 50 年卒）

NHKの人形劇「ひょっこりひょうたん島」世代だ。子どもたち人と、一癖も二癖もある大人 5 人が島ごと漂流するお話で、毎回、愉快的台詞に大笑いした。挿入歌のひとつに「ドン・ガバチョの未来を信じる歌」がある。今日がだめなら明日、明後日……明日がずっとあるホイ♪という旨を、島の大統領ドン・ガバチョが植木等よろしく腕をふりふり、景気よく歌う。今も私のお気に入りだ。

とはいえ、東日本大震災とコロナ禍では、明日が見えないという思いにもなった。

実は江戸期にも同様の惨禍が起きている。1855 年には安政の大地震が発生した。1857 年、1862 年のコレラ流行では 100 万都市の江戸で数十万人もが亡くなった。自粛期間にこの時期が舞台の小説を書いていて考えさせられたこともある。島国で文化・人種が均質のため、行動を一にすることが習性なのは江戸も現代も同じだが、江戸では惨禍を自分のものとして、川柳や駄洒落などで自ら笑い飛ば

コロナ禍、廃業を余儀なくされる演劇人も多いのですが、何とか踏ん張る力を得るためみんなで支え合っていると思っています。私も昨年から五本の芝居を上演しました。客席を半分に、密を避け、消毒を繰り返すという過酷な状況でしたが、何とか頑張れました。大きな赤字をどうするか？ 66 歳になった今も懸命に働くしかありません。

皆さんも勉強したいのにできない状況にある方もおられると思います。私たち年配の先輩たちも懸命に支援したいと思っていますのでどうぞ夢を失わず、未来を信じて乗り越えて下さい。シベリアから帰国した 94 歳の方が私に言いました。

「生きよう」と思わなければダメだ。「生きる」と決意してから生きて帰って来たんです。

全員が自決用の青酸カリを持たされた女性たち。生きようとみんなを励ましたのが山形の女でした。

【お染与太郎珍道中】

2021年2月（新橋演舞場・京都四條南座）

舞台『お染与太郎珍道中』

【さるすべり】2020 年 8 月（座・高円寺 1）
「女々しきカプロジェクト序章」オフィス300公演
舞台『さるすべり〜コロナノコロ』
渡辺えり・木野花



そうともした。だが現代では判断と責任は人に預け、意見が出るのを待ち、それが駄目となると一転、いらだちをぶつけるように批判にまわる傾向が加速していたように感じる。他国のように暴動も起こさず、都市封鎖も個人の動きを監視することもなく、社会の維持のために人々が行動を抑制しうる日本の美点は大切にしつつ、自ら考え、判断する力をもう少し育てることができたら、さらに冷静に現実と向き合い、未来に進んでいけるのではないかなと思わずにはいられない。日本には声を出すと叩かれる面があるが、島民の顰蹙コールをものともせず、明日を信じ演説を続けるドン・ガバチョのように、自分の考えを述べるリスクを引き受ける人が増えてくれればいいなと思う。ということまで。

「みなさ〜ん！コロナ禍が収束したら、紅を引き、お洒落をして外に出て、仲間や友人と笑い、思い切り語り合いましょう」

田中 克子（昭和 32 年卒）

外国ルーツの子も日本の子

私は、ボランティア活動「外国にルーツを持つ子の学習支援」に参加して、もう 15 年になる。初めて出会った少年 J はもう 29 歳。「日本をこんなにきれいで安全な国にしたのは、お年寄り達である。このお年寄りを大切にしなければ。」老人介護施設に勤めた時の J の言葉である。

昨年はコロナ禍でリモート学習を余儀なくされたが、子ども達はみなよく頑張った。対面学習に戻ってスタッフ一同驚いているのは、子ども達が実に健気なのである。心細い中、外との繋がりが唯一スタッフであったのかもしれない。

お蔭様で今年は 3 年生全員高校合格。親に頼れず日常の細かなことまで背負って生きてきた S くんも、不安と戸惑いの中、無事難関高を突破した。これからは自立した日本人になることは勿論、世界にも羽ばたいて行って欲しいと願っている。

曽我 淳子（昭和 60 年卒）

近くの小学校の学童保育で働いています。私がこの仕事を始めたときの 1 年生が、この春に大学生になります。

昨年は休校に伴い学童保育も閉所となり、再開してから学童での過ごし方のルールも変わりました。以前なら、おやつの中には職員も子どもたちと同じテーブルでいろいろな話をしながら和気藹々と食べていたのですが、今やテーブルにはアクリル板の間仕切りが置かれ、おしゃべりは禁止。大人は子どもとは別の席で食べます。静かなもぐもぐタイムです。

それでも、外遊びは新型コロナもどく吹く風で、今も昔も変わりません。子どもたちは元気いっぱい校庭を駆け回っています。今の流行りは鬼ごっこ。早く、マスクを外して遊べる日がくるといいね。



画：栗野 純子先生 こき草

中原 三都（平成 4 年卒）

2020 年の春…身体のケア、講座やイベント仕事も次々とキャンセル。自宅で絵を描いている時間が心の安らぎでした。絵を見たお客さまから「心が穏やかになる」と言われて最初は電子出版を考えましたが、手で触れられる本にしようと作品集を作りました。パソコンで編集し、素人でも簡単に作れる時代！感激です。

同級生とも SNS で繋がっているお陰で山形を感じたり、工夫しながら日々を楽しんでいる様子を勇気と希望をもらいました。

後藤 志津子（昭和 53 年卒）

神奈川県立高校に勤務しています。昨年度は第 1 学年の担任をしていました。入学式は本人のみの出席で、保護者や来賓の出席はありませんでした。寂しくもありましたが、さっそく自立を求められる機会にもなりました。式後すぐに休校になり、6 月 1 週目から時差短縮授業が始まりました。会う時間が短く、マスク着用のため、1 学期が終わってもぎこちなさが残りました。

ただ、生徒たちは、SNS を活用してつながりを強くし、縮小された中での行事を工夫しながら楽しみ、学校生活を充実させようとする力を持っています。

高校生のこうしたエネルギーに触れると、なかなかこの仕事を辞めることができません。



画：栗野 純子先生
(S61~H19
西高在職)

さくらんぼ



紅花

塩田 千晶（平成 10 年卒）

コロナ下での卒業の日に

先日、長男が小学校を卒業しました。コロナの影響で制限される中、工夫を凝らしての卒業式となりました。

思えば、最高学年としての一年間は多くの行事が中止になり、休校で友人や先生に会えない期間は落胆するわが子を目の当たりにすることもありました。

しかし、それでも遅く日々を過ごし、晴れの日を迎えた彼らは、仲間との別れを惜しみつつ、中学生活への期待と不安、また今日の主役であることへの緊張と誇りに満ちた表情をしており、マスク越しにより輝いて感じられました。叶わなかったことも多かった分、当たり前であることへの感謝を学び、仲間の大切さを知った彼らは、より一層大きく羽ばたけることを信じてやみません。

【中原さんイラスト】つながる春のハートアート



会える日を楽しみにしながらも、こんな時だから『できる事』発見の一年。小さな幸せ、大切にしたい人やモノをじっくりかみしめる日々感謝です。（セラピスト）

「老婆は一日にして成らず」か

手すりにつかまり一歩一歩四谷駅の階段を降り、一生懸命「歩いて」発車間際の地下鉄に滑り込んだ。動き出した地下鉄の揺れによたよたとした。一人の青年が、席を立てて近寄ってきた。「どうぞ」と。「大丈夫です」と負け惜しみ、せっかくの親切に応じる。やさしい青年が見てられないほど足元が危うい「老婆」だったのである。それまでも肥満のために、何度か電車で席を譲られた。「妊婦」と間違えられたのである。どう見ても今はただの「肥満老婆」である。

「老婆は一日してならず」樋口恵子さんが 20 年前に言っていた。その彼女は今 89 才。変わらず元気。私はまだ 70 才になったばかり。

「後 20 年か」。私は今まで、自分が老いることに高をくくっていた。病気になったらその時はその時。

もともと肥満で運動不足、娘から「どうかしろ」ときつく言われ、主治医も「痩せなさい」。もちろん全部無視してきた。ところが懸命に歩いてもみんなにズンズン抜かされる。息も切れる。くだり階段は手すりがないと不安、登りも手すり「よいしょ」。正座はとうの昔に無理。さっとは立って移動もできない。腰まで痛い。コロナに隠れて、「座敷布タ」と自分を嘲笑し慰め、日々をそっと過ごしていた。

でも、せめて 10 年後までは「しゃん」としていたい。記憶力も衰え、老眼鏡でも文庫本はつらい。そのうえ、足腰が効かなかったら。さすがの私も愕然とした。このままで居直ったら、口ばかりまわって、まわりに迷惑をかける。せめて日常生活を人並みにできるくらいに痩せて、筋力を付けるしかない。ふざけた態度は改め、努力しよう。

これが私の「70 才の恥ずかしい誓い」である。



伊関 美奈子（昭和 61 年卒）

去年とても残念だったのは、私達東京囃鳴女声合唱団の演奏会が中止になってしまったことでした。その日を目指し 3 年間、毎週末の練習に勤務先の水戸から通い続けていたのに……。でも私はボッカリ空いた時間を埋める新しい趣味を見つけてしまいました。それはゴルフ。茨城県には百以上のゴルフ場がありリーズナブルに楽しめるので一番身近なスポーツとして老若男女が親しんでいて、打ちっぱなしにはファミリーが子供連れ



支部総会での合唱団ステージ

で来ていました。最初は自粛中の運動不足解消のつもりでしたが、始めて見るとなかなか思い通りのスイングが出来ず試行錯誤の日々。

小さな命に向き合って

皆さん「保護犬」という存在をご存知でしょうか。私は保育士として働く傍ら、個人的ライフワークとして NPO 法人 wonderfuldogs という保護団体に所属し、ボランティア活動を 10 年程続けております。人間の身勝手な理由で捨てられたり、繁殖の為に使われた後放棄され、行き場のなくなった犬達をレスキューし、里親として引き取って下さる方を見つけ、決まるまでの一時的期間預かることが私のお役目です。この 1 年あまりのコロナ禍の影響で保護犬達を紹介する場である譲渡会は軒並み中止となり、家族を探している犬達を待たせることが増えてしまいました。今はブログや SNS 等を駆使して里親さんを探す日々です。

また、コロナで在宅時間が長くなり犬でも飼おうとペットショップは大盛況…反面、飼いきれず放棄と言う悲しい現実もおきています。動物の寿命は人間より短いです。家族として最期まで寄り添い、見届けるのが飼い主の責任です。また、安易に飼わない。そして、ペットを迎える際には保護犬と言う選択肢もあることを是非知って頂きたいと思います。コロナ禍であろうとなかろうと動物達の生活は変わりませんし殺処分も行われてしまいます。色々な意味で早く平穏な世の中が訪れます様に。



最初は汚れてビクビクしていた保護犬も
ケアしてあげれば立派な家庭犬になります
お散歩も楽しめるようになりました



譲渡イベント会場にて我が家から卒業したトイプードル

今まで駅のホームで傘を振り回しているおじさんを冷やかに見ていましたが、今ならその気持ちがよくわかります。続くかどうかわからなかったのも、周囲には内緒でインドアでの個人レッスンを受けはじめましたが、すっかりハマってしまい半年が過ぎました。どうにか様になってきたので、この春にはラウンドデビューの予定でいます。またデビューに向けたウェア選びも楽しく、ゴルフ場に立つ姿を想像しながら春物の新作をネットで検索してはワクワクしています。

新しく見つけたアクティブな趣味ゴルフと、今は中断となっている合唱。この二つの趣味が両方楽しめる世の中に早くなって欲しい。来年こそは総会のステージやコンサートホールで皆さんに囃鳴の合唱をお聴きいただければと願いつつ、ゴルフの練習に励んでいる毎日です。

（東京囃鳴女声合唱団）